

中央情報通信

発行日 毎月15日

大日本生産党機関紙

第1344号 平成29年11月15日

11月号

トランプ米大統領 アジア訪問の意味	本紙編集部.....	1
「三方よし」こそ外交の要諦		2
大陸情報		2
千葉県にも在った「ドイツ兵俘虜収容所」		4
余り知られていない韓国と北朝鮮の「真相」		5
相撲の起源を考える		5
本部、地方本部活動報告		6

本 社 〒157-0065 東京都世田谷区上祖師谷 2-5-24-103
電話・FAX (03)5313-0215
賛助購読料 年額 3,000円 (年10回発行)
ホームページ [http:// 大日本生産党.com/](http://大日本生産党.com/)

発 行 所
中 央 情 報 通 信 社
主幹・編集長／谷 田 透

トランプ米大統領 アジア訪問の意味

本紙編集部

トランプ米大統領が日本、韓国、中国を歴訪したが、そのドラマは「脚本家」の腕に相当の差があることを明らかにしたようだ。

まずアメリカとしては、国防の脚本家であるマチス国防長官が分析している通り、日本は独自の戦争遂行能力を持ってはいないが信用できる同盟国、韓国はまるで信用できない問題児、中国はあと十年しなければアメリカと戦争できる軍事力が完成しないので、その間は逆らわない……というものだ。これに基づいてトランプ大統領は「誰か」に脚本を書かせた。

トランプ大統領の身边には中国を捨てた大金持ちの華僑たちが大勢いるので、中国の実態や中国共産党とのパイプなどは完全に手の内にある。だから習近平皇帝の顔を上手く立てれば、アメリカの筋書きで段取りは進むと判断している。その判断が正しかったことはいずれ証明されるだろう。



韓国は「ファビヨン（瞬間湯沸かし器的性質）」と「ケンチャネ（どうにかなるという運任せの性質）」の国民性であることを心配しているアメリカ筋では、同盟国としての責任感や国際常識を後回しにする危険性を韓国政府に感じているので、再び「岸信介&朴正熙の時代」のように日韓を対立反目させてからアメリカが仲介役として強権発動・是正命令を出して韓国世論を逆らえないように縛ろう……と考えているのではないか。

韓国大統領の世論的支持率の問題は、ファビヨンの国民性に起因していると分析されている。瞬間湯沸かし器はスイッ

チを切ればすぐに冷めるものだ。

恐らくトランプ大統領の脚本では、あと二、三年は現状のまま「緊張感高めの安定」を確保した状態で推移すると思われるが、それを利用してアメリカ・中国・日本は充分に発展できる予測という基本を、唯一おびやかす要因がある。

中国のバブルを作り上げた張本人であり、中央銀行局長を長く務めた周小川という金融界の風雲児がいる。アメリカのバブルを作ったFRB議長グリーンズパンに繋がる人物らしいが、その周小川が引退してから「人民元は静かに突然死する可能性がある」と言い出したのだ。

グリーンズパンが引退した後、アメリカ金融界ではサブプライムローン問題が爆発した。それを引き金にして、リーマンショックが起こり、アメリカ経済は弱体化した。その時は日本とEUが協力して世界金融界を支え、辛うじてアメリカ経済は立ち直りの軌道に乗った。これと同じことが近々、中国金融界で発生すると周小川が予測を発表したのである。でも日本・EU・アメリカが協力して助ける……と思っている人は少ないだろう。

日本のバブル発生・崩壊の歴史を教科書として、トランプ大統領は中国に対応しようとするが、それが計算どおり二、三年持つのかどうかは大きな賭けかも知れない。

中国の生き血を早く吸い上げて、日韓に戦争態勢を作らせて、アメリカ経済を回復基調に乗せるために、現在の北朝鮮危機を目一杯利用する——これがトランプ大統領のアジア訪問の重要な意味である。

「三方よし」こそ外交の要諦

本誌ではお馴染み、近江商人のモットーである「三方よし」。この精神なくして商売をするべからずと言われた掟である。

「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」という、三方が円満に納得した上で商売が成立するものであるべきとの教えであるが、これほど簡単そうに見えて難しいことはない。なにしろ、売り手は良い品物を吟味して仕入れ、薄い利益幅を設定して客に売り、良い品物を安く売ることと信用を築いて末永い商売を続ける。買い手は欲しい品物を安く買いたいのだが、それが良い品質で安く安心して買えればその商人を絶対的に信用する。法律にも触れず、ずる賢い手段で競合する商人を出し抜くような卑怯な手を使わなければ、世間は納得し、その商売が世間に何らかの貢献をすれば皆が幸せになれる：これが「三方よし」の基本精神である。

この精神の発端となった「近江の嘉兵衛」の話は有名である。

「のこぎり商売」と呼ばれた伝統的な近江の商売は、大和の蚊帳を仕入れて堺で売り、堺の舶来物を仕入れて京で売り、京の反物を仕入れて名古屋で売り、名古屋で瀬戸物を仕入れて江戸で売り、江戸で小間物を仕入れて近江に帰る：という、押したり引いたりしながら少しずつ儲けていく商売である。この近江商人の一人である嘉兵衛は、のこぎり商売をしながら東北にまで進出していたが、そこで奥州の飢饉を助けようと仲間呼びかけて食料を援助し、手間仕事として男には炭焼きを、女には木綿織りを教えて商品を作らせた。その商品を嘉兵衛が全部

仕入れて売り、農作物も代官所の許可を得て一手に買い上げた。奥州の飢饉は近江商人の力で収益が上げられる副業を作ってくれたのである。この時に嘉兵衛が近江商人の心得として叫んだのが「三方よし」の精神である。

さて、現在の外交を見てみよう。この近江商人の「三方よし」の精神と大きく違う所があることに誰もが気づくだろう。

どこの国家でも「お家の事情」が最優先されるのは道理であるが、再優先と唯一絶対とは似て非なるものである。自分の利益のためには相手を叩き、国際的に再優先されるべき課題を先送りし、競合する仲間を「敵の敵は味方」という論理だけで糾合し、最終的に信用が得られるとでも思っているのだろうか。

資金や資源で屈服させたり、軍事力や取引材料で恫喝したり、特許や裁判で萎縮させることで己が有利になろうとするなら、それは末長い信用ではなく一時的な勝ちでしかない。

日本外交がアメリカの下請けと呼ばれて久しいが、日本外交の要諦が「アメリカ追随」であってはならない。日本外交の要諦こそ「三方よし」の精神であると国際的に宣言し、それを実行する努力を惜しんではならない。国民も、日本政府に強くそれを望むべきである。



近江商人

大陸情報

新しい中共海軍副司令は抗日エリート

毛沢東時代の抗日将軍として有名だった馮玉祥の孫で、一九六二年に安徽省生まれの馮丹宇が新しい中共海軍副司令に就任した。

大連艦隊学院を卒業した海軍のエリートで、北海艦隊や国防科学委員会キャリアを積み、二〇〇三年に海軍局長、二〇〇五年七月に海軍少将、二〇〇五年十二月に装備部副部長、二〇一〇年に装備部部長、二〇一四年に総合計画部副部長、二〇一六年に装備発展部副部長という

経歴を踏んできた。

習近平としては、「中共海軍は抗日戦争のために存在する」という意味を込めて彼を海軍副司令に抜擢したようである。



馮丹宇

中共海軍の増強は、新型空母の建設を発表したことに窺える。そのために、ウクライナから空母設計者を青島に移住させ、破格の厚遇を

約束している。その新型空母の構想図が「艦船知識」という中共海軍雑誌に発表されたが、驚くべきことに離着陸甲板はフラットで、しかもカタパルトが装備されている。記事を読むと、このカタパルトは「蒸気打ち上げ方式」ではなく「超伝導打ち上げ方式」を採用するのだと書かれている。



ロシアに兵器を売れないウクライナとすれば、いくら優秀な技術者でも失業することを防げない事情がある。それを根こそぎ高給で雇ってくれる中共解放軍はウクライナにとって救世主である。

中共はミサイルや武器を偽装して陸運する

中共のミサイルや武器の移動は、アメリカの人工衛星が厳しく監視している。

アメリカは「経済と政治は別だ」とトランプ大統領が選挙前から言っていたように、中国の消費や投資がアメリカ経済には不可欠だけれども、中国共産党は明確な敵であると主張する。特に、アメリカにとって中国の軍事は最大の懸念事項である。

写真上は、弾道ミサイルを民間の大型トラックで陸運している所である。



写真下は、部隊に新型武器を納入する民間のトラックに「ペプシコーラ」などと手書きしたシートを被せて陸運している所である。



中共がアメリカの人工衛星を警戒しているということは、つまり「国連安保理事会で問題に

中国の高校では軍事訓練をさせられている

習近平政権になって「国防動員法」が制定された。海外にいる中国人は例え帰化していても、この国防動員法に縛られて「中国人として敵国と戦争する義務を持つ」とされ、違反すれば最高刑は死刑だ。

国内の高校生も義務として軍事訓練を受けさせられる。国家が裕福なので、制服などは新品を貸与されるというが、粗悪品のため「訓練用の運動靴は蒸れて水虫に罹る」と言われている。

そこで「神器」と称されているのが、女性用生理ナプキンである。中国の生理ナプキンには、

ウクライナという国は、誤解を恐れずに言えば「軍需産業以外に何も無い」国である。我が国の北方領土を支配しているウラジオストクのマフィア組織の上部組織がウクライナの軍需産業系マフィアなのであり、戦争と暴力を職業としている数少ない国家の一つなのである。

そのウクライナの軍需産業と中共解放軍海軍が結託した上に、技術者や設計者を造船所や研究所の近くに移住させて厚遇するとすれば、中共はウクライナの技術で軍艦や兵器を開発することになる。その上に「抗日エリート」を海軍副司令という艦隊最高責任者に任命したということは、日本海上自衛隊をいつでも凌駕する海軍力を見せつけると宣言しているに等しい。

されたら困る」という意味である。国連安保理事会において、アメリカと中国は明確な敵対国である。

ロシアは、プーチン大統領の選挙が来年三月なので、それまでにアメリカの経済制裁を解除させたいという本音があり、経済制裁解除がなければロシア国民の不満が爆発するので、それまではアメリカに表立って逆らえないという事情がある。だから、決して中国の肩は持たない。

中国とすれば、何かの弾みでアメリカ・日本・韓国・台湾だけでなくロシアまでも敵になるかもしれない恐怖感を持っている。そう考えれば、ミサイルや武器を移動させるのに神経質になって偽装するのも理解できる。

三五(S)、
三六(M)、
三七(L)
の三サイ



ズあり、これが訓練用運動靴の中敷きに最適だというのだ。ドラッグストアには男子高校生たちが生理ナプキンを求めて押しかけている。殆どの店では「軍事専用」と書いて売られている(写真上)。男子高校生たちは生理ナプキンをハサミで足の形に切り、訓練用の運動靴の中敷きにして安心している(写真下)。

北朝鮮の核兵器技術者はハルビン工業大学留学生

中国黒竜江省ハルビンにあるハルビン工業大学はエリート校だが、各国から留学生者を数多く受け入れて莫大な授業料を徴収して儲ける悪評もある大学だ。

そこに北朝鮮から核兵器に関する技術者が約二六〇人送り込まれ、アパートで共同生活しながら教育を受けていたことが判明した。

国連安保理事会も最初の「北朝鮮制裁」の時には、教育制裁を否定したので、彼らは核兵器技術の教育を受け続けられた。

ところが、二回目の国連安保理事会の北朝鮮

毛沢東の孫（毛新宇）を完全無視する習近平

夏に北戴河会議（中共最高意思決定長老会議）で毛新宇を外すことが決められたと噂になっていたが、案の定、九月の解放軍のパーティに参加した習近平が毛新宇の前を完全無視で通り過ぎ、女性軍幹部と乾杯して談笑し始めた。

呆氣に取られていた毛だったが、流石に彼も

制裁で、「教育についても制裁対象とする」と決められ、北朝鮮からの留学生者はハルビン大学から大半が帰国した。

下の写真は、中国の「博

訊」が報道したもので、ハルビン大学に登録された北朝鮮核兵器技術者の金京設である。彼こそ、北朝鮮ICBMの主要技術者だと言われている人物である。



千葉県にも在った「ドイツ兵俘虜収容所」

徳島県鳴門市にある「ドイツ兵俘虜収容所」は有名である。坂東俘虜収容所は、第一次世界大戦で日本が勝利者となり敗戦国のドイツ兵を連行して収容した施設である。世界の優等国の仲間入りのためには、日本が敗戦国兵士の人権に配慮した紳士国だと世界中に理解させねばならない。そのため、ここでは優秀な陸軍幹部が所長となって管理し、ドイツ兵の自主性を尊重していた。収容所ではドイツ兵捕虜たちが自主管理し、新聞を発行し、集会や音楽会などを開き、朝の点呼が終われば鳴門市の日本人グループの所にパン作りや楽器演奏を教えに行き、夕方の点呼に帰って来るという生活を送っていた。鳴門市民たちとドイツ兵捕虜たちがクリスマスに合同で演奏したのが、我が国最初の「第九」なのである。

収容所長は定年退官し、故郷の福島県会津若松市に戻って初代市長になった。

この坂東収容所の物語は映画にもなり、「バルトの楽園」として文部省推薦のヒット作にもなった。地元鳴門市では、収容所にドイツ館という記念館が建てられ、日独友好の象徴として当時の記念品や資料が展示されている。

ドイツ兵捕虜の収容所は鳴門市だけかと思えば、千葉県習志野市にも存在していたという記

事が、過日新聞に掲載された。

ここでも鳴門市と同様に、ドイツ兵捕虜たちは自主性が認められて施設内でスポーツや音楽に打ち込んだようである。収容所を出て町に「ドイツの先進的な音楽演奏や料理などを教えに行く」という、鳴門市で認められていたような自由はなかったが、それでも世界史に残るような捕虜待遇である。

千葉県習志野市では、この歴史的事実が長く忘れられていたそうだが、十年ほど前に教育委員会が本格的な調査を始めてから、あれこれと記録や写真が出てきたそうである。

習志野市では、この時にドイツ兵捕虜が作曲した歌曲が、地元の音楽家たちによって市民会館で演奏会が開かれるまでになった。

暗い戦争の記憶の隣には、明るい収容所での記憶も存在している。歴史は複雑だが、徳島県と千葉県での、第一次世界大戦のドイツ兵捕虜をどのように扱っていたかという歴史は忘れなようにしたいものである。



余り知られていない韓国と北朝鮮の「真相」

マスコミやネットニュースなどでは、意図的な「真相」が流されるのだが、軽い客観的な話は無視される傾向にある。そこで、韓国と北朝鮮の「真相」の幾つかを現地の関係者に聞いてみる。

▼韓国の労働組合がデモをする時には幹部が現場で命令して組合員を動かすのだが、それは軍隊経験者の組合員ばかりを動員する。「右向け右」に慣れているので動かしやすいとか。だから現代自動車などは労組がデモを始めると会社は停止するので、労使交渉は毎回三%アップなどの落とし所を決めてから儀式的にするそう。国民の現代自動車労組に対する怨嗟はかなり強い。韓国の財閥系大手企業では、労組の軍隊化を恐れている。労組の幹部たちの大半は、朴正熙大統領の時代に左翼学生として反政府運動をしている時に逮捕され、「刑務所で思想改造するか、軍隊で根性を叩き直すか選べ」と言われて軍隊に行った連中ばかり。実は現在の文在寅大統領もそれだ。

▼次に北朝鮮の現状だが、特別地区の平壤都市部では全ての店舗で支払いの時にデビットカードを使用する。銀行に預金してある通帳から、そのカードで買物する度に引き落とされる。特権階級の特別市なので最先端なのだ。また、外国人にとって平壤は世界一安心な町だと言われているのだが、住民相互監視体制が整っている。外国人観光客に迷惑をかけたと密告されれば労働強化所に送られる。市民は緊張の日々を送っている。

▼北朝鮮のスマホ普及台数は三七〇万台、全てアンドロイドでエジプトのオラスコム社が納入

している。ネットの通信基地局は中国に依存していたが、全てロシアに切り替える。全ての背景にイギリスがいる。

▼さて、北朝鮮と中国の不仲が表面化しているが、中国がトランプ大統領が提唱して国連安保理事会が決議した北朝鮮制裁に同調したのが原因と世間では考えられている。しかし実は、中国が援助食料として平壤に送った食料は、不良汚染毒性食品を中国当局が国内で摘発したもので、本来は中国で廃棄処分されるはずのもので、それを北朝鮮に食料援助品として平然と送り、知らずに食べた平壤市民に死者が大勢出たことがきっかけになっている。金正恩委員長は、中国に対して激怒したそう。

▼北朝鮮と韓国が共同で運営していた開城（ケソン）工業団地だが、韓国が国連制裁決議に基づき撤退した後、北朝鮮側が韓国の機械設備や在庫原料を「韓国が所有権放棄したもの」と宣言して略奪し、操業を始めている。製品は中国が密輸して買い取る。実は、韓国が残した在庫原料を使い切ったら操業を中止することになっている。

▼三十八度線の見学は、北朝鮮側は外国人観光客に大つびらに開放しているが、韓国側は非常に厳しくデリケートな規制を設けている。北朝鮮では見学に服装規制はないが、韓国では服装規制は異様に厳しい。「ジージパンは北から撃たれる危険性がある。ミニスカートは兵士を欲情させる」などとナンセンスだ。実は、三十八度線見学ツアーは、韓国政府と財閥系企業が結託した観光ビジネスなのだ。

相撲の起源を考える

むすびの集ひ事務局

我が国の「国技」と呼ばれている相撲であるが、その国技としての起源を考えることは重要なことであろう。

相撲の起源は、野見宿禰と當麻蹶速が垂仁天皇の命令により死闘を繰り広げたものといわれているが、その背景を詳細に見てみよう。

日本書紀の巻六「垂仁天皇」には、當麻村の蹶速という男が乱暴狼藉の限りを尽くしているが誰も彼を倒せないで、それならば古今東西最強の男が出雲にいる野見宿禰なので、大和に呼んで當麻蹶速を倒させようとした物語が書か

れている。

ここで重要なのは、垂仁天皇が朝廷の権威と権力を守るために「正々堂々」と天覧の死闘を計画したことである。日本書紀には、「両雄は「四股を踏んでから立ち合い、野見宿禰が當麻蹶速の肋骨をへし折ってから腰骨を粉碎して殺した」とある。これはローマのコロセウムで演じられていたグラディエーターの死闘そのものである。紀元前七七六年の古代オリンピック種目には、素手で殺し合う「パンクロチオン」という競技が正式に記録されている、

第十代の崇神天皇から三輪山を中心とした地域での大和朝廷が発足しているが、次代の垂仁天皇が朝廷の安定に不可欠な要素の一つとして「相撲」を採用し、勝者の野見宿禰は天皇側近となり、皇后の死去に伴う殉死の風習を中止させ、出雲から半島渡りの土師（はじ／焼物作り）を百家族呼び寄せて人型の埴輪を大量に作らせ皇后の墳墓に納めている。野見宿禰は伝承では、天穗日命の十四世子孫と言われている。父親はまた、崇神天皇から初代出雲國造を任命されたウカツクヌだとされる。ということは、垂仁天皇と野見宿禰は遠い親戚関係にあったのであり、同じ一族だったと見てよいだろう。

この当時、大和と出雲はさほど長旅ではなかったようで、既に大和と出雲、大和と太宰府の間には円滑な往来が可能になっていたようだ。江戸時代の相撲巡業の記録を見ても、「雷電為右衛門日記」には出雲から堺までを巡業しながら十日で移動したとあり、大和と出雲の間は急げば四日で行ける道程だったと見られる。先進地（出雲、太宰府、敦賀など）と中心地（大和）とは、主要幹線があったのは当然のことだろう。

相撲の記録を見ると、奈良時代初期までは土俵も禁じ手も、時間制限もない殺し合いだったようだ。しかし雄略天皇の時代には、宮中で女官たちに裸で相撲を取らせる娯楽的な要素も生まれている。パンクロチオンのな相撲と、娯楽的な相撲という二つの顔が見られるのであるが、皇極天皇の時代には、百濟からの使節を歓待するために「子供相撲」が演じられた記録がある。ここで新たな儀礼としての顔を持つことになる。相撲には、朝廷（国家）としての外交的なものと内政的なものが併存していたようだ。

第四十四代元正天皇の時代には、正式な朝廷の役職として「相撲官」が立てられ、朝廷儀式としての制度も完成している。正式な「国技」としての位置付けが明確にされたと言えるが、次代の聖武天皇は伊勢などの近畿の大社へ「奉納相撲」を実施して、神様に相撲を奉納するという特殊な形が作られている。

また聖武天皇は、皇居内に土俵を設けて宮中相撲を楽しんでいたとあり、全国から相撲の強い人物が推挙されて集まってきたようだ。「天皇が相撲を後援する」ということが重要であり、この時期に「武道」として相撲が存在していたと考えられる。

大和と出雲の結びつきがあり、第十一代垂仁天皇のパンクロチオンの天覧相撲の開始から、我が国では「国技・相撲」が二千年の伝統を持つまでに成長してきたのである。力士の国籍も民族も関係なく、ただ天皇が神社に奉納するに値する相撲であれば、常に「国技」として扱われてきたのである。相撲の背景や経過には日本人として知っておくべき事柄が数多くある。

本部、地方本部活動報告

■本部、関東・東北本部

◇十一月四日（土）

・午後四時より台東区池之端「上野東天紅」において「青年思想研究会・亡き先憂を偲ぶ会」。内藤幹事長、山田関東本部副本部長が出席（写真①）。

■関西本部

◇九月十五日（金）

・午後六時三十分より、尼崎市において「むすびの集い勉強会」。出席者、党員党友他六名。テーマは「日本統一王朝誕生の風景（仮説）」他。

◇十月七日（土）

・正午より、朝来市生野町・山口護国神社にて、毎年恒例の生野義拳慰霊碑清掃奉仕。有志七名が参加し、雑草除去、落葉集めに励んだ。清掃後、黙祷を捧げ境内にて直会。午後二時頃解散した。（写真②）

◇十月二十七日（金）

・午後七時より、尼崎市内において「むすびの集い勉強会」。九州佐賀よりはるばる丹野党首が出席。これは平成二十六年秋の党首就任以来、各地方本部を一巡する意向を持ちつつも、折悪しく台風災害などで関西のみ延期となっていたが、此の度、党首自身の強い希望により急遽実現したもの。会場には党員ほか有志十五名が詰めかけた。勉強会のテーマは「相撲の起源を考える」他。最後に、党首から挨拶があり、自身で竹島実地調査に行った際、島根県松江市の真摯な姿勢に対し、外務省の余りの不甲斐なさと国家意識の欠如を目の前で確認した怒りと悲しみを述べ、出席者の強い共感を喚起した（写真③）。此の後、丹野党首は再会を約し、とんぼ帰りで最終新幹線で帰路に就き持ち前のバイタリティを遺憾なく発揮した。

